

ヒルコの誕生と放流をめぐる一考察

大岡 小霧

一、ヒルコ研究の現在

記紀神話においてイザナキ・イザナミの間に誕生したヒルコは、従来「蛭のように骨のないぐにやぐにやした子」として解釈されてきた。特に戦後は、比較神話学的方法が盛んに導入され、国生み神話と洪水型兄妹相姦始祖神話との関連性が強調されて、ヒルコ不具児説の重大な根拠としてほぼ定説の扱いを受けている。

一方、この見解と相対する立場として、「ヒルコ＝日子」説をあげることができる。これは、『紀』の所伝中ヒルコが三貴子と共に誕生していることが注目されたためで、「ヒルコ」なる名称が「ヒルメ」と対になるものと考えられることが最も大きな根拠となっている。さらに、ヒルコを乗せて流される天磐楯樟船を、世界に広がる太陽船の信仰と結びつけて考えることにより、

この説は補強されているといえる。

簡単にまとめれば、今とりあげた不具児説と日子説とが、ヒルコについて現在の学説を大きく二分しているということになる。しかし、この二説はそれぞれの方法の根底になる問題意識に大きな差異があり、しかもその点あまり考慮されていままに、一方の説が批判もしくは否定されているような気がしてならない。そこで、本橋では、兄妹始祖から生まれ来る子の意味、舟で流されることの意味を考えながら、改めてヒルコについて検討してみたい。

二、イザナキ・イザナミについて

イザナキ・イザナミは兄妹であるといわれている。そういつた、記紀神話の体系に組み込まれる以前の岐美二神の性格を、記紀神話を手がかりに探ってみることにしよう。

岡田精司氏は、履中紀五年九月の条、及び允恭紀十四年九月の条をとりあげ、「島の崇る神」としての、神代紀からは見られないもう一つのイザナキ像を提出している。その二伝承は次の通りである。

秋九月の乙酉の朔壬寅に、天皇、淡路嶋に狩したまふ。

是の日に、河内の飼部等、從駕へまつりて轡に執けり。是より先に、飼部の鯨、皆差えず。時に嶋に居します伊弉諾神、祝に託りて曰く、「血の臭きに堪えず」とのたまふ。因りて、トふ。兆に云はく、「飼部等の鯨の気を悪む」といふ。故、是より以後、頓に絶えて飼部を鯨せずして止む。

(履中紀五年九月条)

十四年の秋九月の癸丑の朔甲子に、天皇、淡路嶋に獵したまふ。時に麋鹿・猿・猪、莫莫紛紛に、山谷に盈てり。炎のごと起ち蠅のごと散ぐ。然れども終日に一つの獸をだに得たまはず。是に、獵止めて更にトふ。嶋の神、崇りて曰はく、「獸を得ざるは、是我が心なり。赤石の海の底に、真珠有り。其の珠を我に祠らば、悉に獸を得しめむ」とのたまふ。

(允恭紀十四年九月条)

允恭十四年紀中の「嶋神」は、岡田氏もいうように、履中五年紀にみえる「嶋に居します伊弉諾の神」に一致すると考えてよいだろう。そうした場合、この「嶋神」という表現は大きな意味を持つてくる。イザナキが、その名もあげられずに「嶋神」

とだけ表現されていることから、岡田氏は、イザナキは元来「淡路島の地方的な地主神に過ぎぬ存在である」と考えている。そして一方、淡路島をはじめとする海人集団によるイザナキ信仰と、そういった海人集団と朝廷との結びつき、海人の語部の存在などを述べており、これらは既に定説と考えてよい。このようなことを考え合わせると、ここではつきりしてよい。このようにある。始源的な段階の伝承として、岐美二神が「大八洲」を生んだはずがない、ということである。

もともと伝承とは共同体に密着したものであり、共同体の幻想を基盤として初めて成り立つものである。従って、淡路島の人々は自分たちの神が生み出したものとして自分たちの生活を根拠づける何かを幻想するのであって、国家レベルの幻想を持つはずがないのである。岡田氏も言うように、古代の民衆が意識した「ヘクニ」というものはごく限られた狭い範囲であり、民衆の意識の中に国家としての「大八洲」なるものがあるはずがないのであつた。

また、岐美二神が兄妹であるという点に関しては、小島環礼氏によって、長崎県西彼杵郡の地搦歌にそういう伝承が見られると報告されている。一方、比較神話学的方法を全く離れて研究している西郷信綱氏も、記紀の内部徴証から岐美二神は兄妹であるとの結論に達しており、この説の妥当性は論証されたように思う。

だが問題は次の次のステップである。比較神話学的立場からの研究者たちは、岐美の婚姻は兄妹婚である故、ヒルコは不具児であると結ぶ。あたかも当然の関係であるかのように、だ。

しかし、果たしてこれは本当なのであろうか。比較神話学的方法の成果は、その神話の形、つまり見かけの把握であつて、その神話が反映する共同幻想そのものではない。あくまでも共同幻想が投影されたその結果なのである。

洪水型兄妹始祖伝承において、生み損いに見える初生児（或いは第二子・第三子を含む）は、幻想の段階として考えたときにはどう捉えるべきなのか、ということを含めて、ヒルコは不具児であるなどと結論を下しても説得力に欠けている。

むしろ問題は、兄妹婚の結果生み損いらしく見える子が生まれたと語られるのは何故か、その子はどのような存在と考えられるか、というレベルに移されるべきなのである。

以上のことを踏まえた上で、ヒルコについて検討し直すために、兄妹始祖における不具児生みの伝承について考えてみたい。

三、兄妹始祖と不具児生み

兄妹が始祖となり、その初生児として不具児或いは人間以外の生物等、所謂生み損いを出産する、という伝承の裏にはどのような神話的幻想が存在したのだろうか。

この問題に対して、兄妹婚から不具児が誕生するのを当然の如く考え、そこから逆に兄妹婚の禁忌を説明してゆくのは、伝承の捉え方の方向性として恐らく誤まつている。仮に不具児を文字通り不具児と受け取って兄妹婚の禁忌との関連性を考えるにしても、少なくともそれが伝承というレベルにあつては、兄

妹婚の禁忌を侵した結果として不具児が生まれた、と捉え返されているはずである。つまり、兄妹婚の禁忌は何らかの理由によつて既に存在しており、それを破つたために不具児が生まれた、というようにである。これは、不具児ばかりでなく異生物が生まれる伝承があることを考えればわかりやすい。しかも、始祖という位置に立つことにおいて、この兄妹婚は理想婚でなければならぬ。始祖とは共同体にとつて「神」の位置にあるからである。

兄妹婚が理想婚であり、同時に禁忌でもあるという矛盾した構造を最も明析に解明したのは古橋信孝氏であらう。古橋氏によれば、始祖が兄妹として語られるのは、血筋の正統性の要求によるという。その一方で、「家族」へ「世代」という概念を導入したときに初めて、兄妹婚は禁忌となるという。この構造をより単純化して捉えれば、共同幻想の問題として理想婚であり、対幻想の問題として禁忌である、ということになるのではないだろうか。

とすれば、始祖という位置に立つ理想婚としての兄妹婚の結果、何故不具児が誕生するのか。この場合の不具児とは、我々の所謂不具児という観念で受け止めてよいものなのか。異生物生みについてはどうか。

兄妹婚の伝承について、これまで多数の論者が試みられていて、この点に関しては何故か今だに「近親者からは不具児が生まれる確率が高い」といった優生学的解釈をもとに、表面的に片づけられてしまつている。だが、先述したように、これはむしろ兄妹婚の禁忌を破つた結果、不具児なり異生物な

りが生まれた、と捉えるべきである。このとき、不具児や異性を物包括して捉える概念とは何か。それは、〈異常な子〉の概念と考えるべきなのではないだろうか。そして、そのような〈異常な子〉が何故生まれて来るのかと言えば、兄妹婚という〈異常な婚〉を行なったからである。

兄妹の婚は、それが禁忌であるという意味で〈異常な婚〉である。このとき、禁忌を侵した結果である〈異常な子〉は、〈ケカレ〉として捉えられる。だが兄妹始祖の婚が〈異常な婚〉である理由は、それ以上に理想婚である、というところにあると考えられる。このとき〈異常な婚〉は〈神の婚〉という位置にあり、〈異常な子〉は〈神の子〉として、〈ハレ〉の存在となるだろう。とすれば、この〈異常な子〉は、〈賤〉と〈貴〉の両義性を体現し、怖れの対象となる神聖な存在である。このことは、古橋氏が紹介している宮古の多良間島の洪水伝承を考えるとわかりやすい。その伝承では、洪水後生き残った兄妹が夫婦となつて、最初に生まれたのはポウ（ヘビ）とバカギサ（とかげ）であつた。次にアズカリ（シャコ貝）とブー（芋麻）を産み、

その後人間が生まれた、と語られている。古橋氏は、この伝承で最初に生まれるポウとバカギサは生命の再生に関わる共同幻想の象徴と考えられることを、別の伝承から導いている。また、二番目に生まれるアズカリとブーについては、出産の際へその緒をブーで結んで切り、胞衣はアズカリの中に入れて上中に埋めるならわしがあつたことを報告し、やはり生命の誕生に関わる共同幻想の象徴と考えられることを述べている。この例を考えれば、兄妹始祖が人間に先立つて生み出したのは、共同

幻想を象徴する神聖な生物であつたことがわかる。

とすれば、兄妹が婚姻により始祖となる伝承では、初めに神聖な生物を、〈神〉に近い〈貴〉なる存在を生み出す形が本来的だつたのではないか、という仮説もたてられよう。そしてその〈貴〉なる存在は、共同体にとつて畏怖の対象であつたはずである。従つて、こういった存在を生んだ後棄ててしまつた或いは流してしまつた、と伝承されているのは、そうすることに就いて共同体外の存在にした、ということを示していると思われる。つまり、棄てたり流したりすることによつて、言わば〈神〉のもとへ送り返すのである。

このように、所謂生み損いの伝承というのは、本来その共同体に対して何らかの意味を持つ神聖な存在を生むことであつたと考える。故に、ヒルコの出生と放流についても、このように読みとることが可能と思われる。

四、ヒルメとヒルコ

『記』におけるヒルコは、島生みの初生児であり、良からぬ子として葦舟で流されることになつてゐる。ところが、『紀』に関していえば、第一の一書が『記』同様の形を持つ一方、本文及び第二の一書では所謂三貴子と共に生まれた脚の立たない子と伝えられている。この後者の形の伝承からヒルコについて何が考えられるかというとは、当然問題にしなければならぬ。

三貴子出生の段において、ヒルコは、「大日靈貴」「天照大神」「天照大日靈尊」などと伝えられる日神と、ツクヨミなる月神に

續いて誕生したとされている。このとき、たとえ脚の立たない子であったにせよ、日神・月神の兄弟として並べられたヒルコには、やはり「貴」なる面を見て然るべきである。脚が立たないという「異常」さそのものに「聖」の面を読みとつてもよい。いずれにせよ、ヒルコは尋常ならぬ子であった。しかし、この「異常」な子の出産の理由を二神の婚姻の際の女人先唱に求めてゐるのは、後代的な解釈といわれている。

ところで、先に日神の名称を三通りあげておいたが、アマテラスオオミカミなる名称よりは、オオヒルメの方が本来的とされている。とすれば、日神は女性神と意識されていたことになる。また、記紀中すべての伝承で日神に次いで生まれる月神ツクヨミが、実はその伝承中でほとんど活躍しておらず名目的存在に過ぎないということは、既にいわれているところである。

とすれば、貴子出生の順序として、日神・月神・ヒルコという形をあまり固定的に見てはいけないことになりはしないだろうか。ツクヨミが名ばかりの存在に過ぎないのは、オオヒルメと対をなすために割合後代的な段階でつくり出されたためであるとも考えられよう。

そうした場合、オオヒルメに対して観念的にツクヨミが生み出される以前のものとしては、如何なる形が考えられるだろうか。或いはここに、女人先唱による生み損いという解釈がなされる以前のヒルコ像を求める鍵が隠されているのかもしれない。やはりヒルコという名称はヒルメと対をなすのではないか。

『記』及び『紀』本文では、天照大神について次のように伝える部分がある。

天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣織らしめたまひし時、其の服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥ぎに剥ぎて墮し入る時に、天の服織女見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき。

(『記』)

天照大神の、方に神衣を織りつつ、斎服殿に居しますを見て、則ち天斑駒を剥ぎて、殿の裳を穿ちて投げ納る。是の時に、天照大神、驚動きたまひて、梭を以て身を傷ましむ。

(『紀』本文)

これは、スサノヲの数々の悪行を伝える記事の一部分である。ここでは、天照大神は斎服殿にて神衣を織る女性、即ち巫女となつてゐる。そして、「梭に陰上を衝きて死にき」「梭を以て身を傷ましむ」という部分は三輪山神婚説話につながると思われ、梭にて傷つくのはやはり巫女の証明である。また、『紀』第一の一書では、斎服殿で神衣を織り、梭によって傷つくのは稚日女の行為とされていて、「ヒルメ」は巫女である、ということがよりわかりやすい。三谷栄一氏は、顕宗紀三年二月の条及び四月の条に月神・日神の祖が高皇産靈とされていることに着目し、「ムスヒとは本来「生す日」なる太陽神であり、ヒルメは「日の妻」でその齋女・憑り代の位置にあることを説いている。とすれば、この太陽神ムスヒとその妻ヒルメとの間に生まれる日の子が、問題のヒルコであるかもしれない。このとき、ヒルメとヒルコは母子関係にあるわけである。しかしながら、仮にこの推論が正しいとすれば、日神の子であるヒルコがやがて成長し

て親神の位置に立ったとき、そこで神婚の際に迎える巫女はやはりヒルメであろうから、ヒルメとヒルコが対をなす、ということにもなるはずである。

尤も、古代において神と巫とは不分明であつたと思われるから、ヒルメは日神とイコルであつたかもしれない。だがとにかく、太陽信仰を司どる女性である。従つて、ここまでに述べてきた事柄に基づくなら、ヒルコは太陽信仰に関わる男性靈格と考へておくことができる。

今紹介したように三谷氏はムスヒを「生す日」と解釈しているが、この一方で、ムスヒの「ヒ」の觀念はより根本的には「靈力」を表わすもの、というところから出發した土橋寛氏の説がある。この見解は大変示唆的であるため、少々長くなるがその一部を次に引用したい。

ヒレは領巾のほかに鱗をも意味するが、ヒル・ヒルという動詞と関係のある語で、マナの觀念を表わす「ヒ」（ムスヒ・クシヒのヒ）を語根としたものであらうと思われる。

ヒル・ヒルという語は、視覚的には光り輝くこと（「名義抄」「曙」「晶」「映暎」をヒルと訓む）、ひらひら動くこと（「蒿」ヒル。「沖」ヒル）、あるいはひらひら動く物（「蛭」ヒル。「蛾」「青蛉」ヒル）に用いられ、味覚的にもひりひりする刺戟的な食用草に用いられる（「蒜」「薤」「葱」ヒル）。ヒヒクも同様、視覚的・聴覚的・味覚的に刺戟の強いことを意味する（「響」「動」ヒヒク。「口ヒヒク」記12）このように感覺的には異質のことからについて、同じヒル・

ヒルの語が用いられるのは、それらに共通するヒ（靈力）の觀念によるものであらう。視覚的な面について言えば、ヒラヒラする物には、靈力の活動が觀念され、ひらひらと飛ぶ蛾や鳥は、人の靈魂の姿とも考えられているのであり、同じ觀念によつて、物をひらひら動かすことによつて生命力を活動させようとする呪具が比礼である。

ヒルはおそらく靈力を意味するヒ（ムスヒ、クシヒ、マガツヒなど）を働かした動詞で、ヒラメク、ヒラヒラなどの語はその派生語であり、ヒヒルは「ヒ・ヒル」の意であらう。鳥や蝶の類がヒラヒラと飛ぶ姿に、靈力の活動を見た古代人の思惟は、ヒルという語の意味からも捉へることができるのである。

この土橋氏の見解をもとに、吉井巖氏は、ヒルコは本来靈威ある存在でありながら、その名称自体に、「蛭」の字が用いられ欠陥児としての印象を与えていく要因を内在させていたこと、また、ヒルコとヒルメは生命力にあふれた男女と考えられ、本来は人祖の誕生を語る伝承であつたことなどを述べている。これは卓見といえるだらうが、土橋氏の説に従えば蛭は古代人にとつて靈力の活動を感じさせるものであつたはずだから、ヒルコがたとえ字義通りに「蛭児」と解されていたにしても、やはり本来的には靈威ある存在であつたであらう。また、ヒルコとヒルメは生命力にあふれた男女であつたかもしれないが、単なる人祖と受け取れるものか、疑問を感じてもいる。むしろ、よ

り神に近い存在なのではないだろうか。なぜならば、ヒルコは舟で流される存在であり、それはヒルコ出生譚にとって重要な要素であると思われるからである。詳しくは後述するが、基本的に、舟は神の乗り物なのではないかと考えられるからである。

五、スサノヲとヒルコ

三貴子出生の段をもとに、ヒルメとヒルコの関係を眺めてきたが、もう一つ、スサノヲとヒルコの共通点・類似性も、見逃せないポイントである。例えば、スサノヲとヒルコは共に日神・月神の兄弟という位置にありながら、高天原を追放される運命にある。この類似性を最も顕著に読み取れるのは『紀』第二の一書であり、恐らくはこの類似性によって、二者はほとんど混同されている。

一書に日はく、日月既に生まれたまひぬ。次に蛭児を生む。此の児、年三歳に満りぬれども、脚尚し立たず。初め、伊奘諾・伊奘冉尊、柱を巡りたまひし時に、陰神先づ喜の言を發ぐ。既に陰陽の理に違へり。所以に、今蛭児を生む。

次に素戔鳴尊を生む。此の神、性悪くして、常に哭き悲むことを好む。國民多に死ぬ。故、其の父母、勅して日く、「假、汝此の國を治らば、必ず殘ひ傷る所多けむとおもふ。故、汝は、以て極めて遠き根國を馭すべし」とのたまふ。

次に鳥磐櫛船を生む。輒ち此の船を以て蛭児を載せて、流の順に放ち棄つ。

この伝承では、追放の理由が明確なのはスサノヲであり、追放を命ぜられているのもまたスサノヲである。しかしながら、スサノヲに追放を命じた後に生み出された鳥磐櫛船を以て、実際に追放されたのは蛭児の方なのである。文脈から言えばそこで追放されるべきはスサノヲであり、これはどうしても混同と言わざるを得ない。

また、ヒルコは「三歳になるまで脚猶し立たず。」(『紀』本文)、スサノヲは「常に哭き泣つるを以て行とす」(『紀』本文)「八拳須心の前に至るまで、啼き伊佐伎」(『記』)と伝えられているが、これについて吉田修作氏は、いづれも嬰兒の特徴の一つであること、成長しても嬰兒形であるということは、単なる不具ではなく常人と異なる靈格のあらわれであることを述べ、ヒルコとスサノヲを同一神格と見做している。少名毘古那の小ささや、本牟智和氣王が「八拳鬚心の前に至るまで真事登波」ぬま(『記』)であったことなど、嬰兒形の特徴の一つであると考えられるならば、それはやはり「聖」の象徴と見做すことができるだろう。吉田氏も言うように、成長しても嬰兒形であるということは、結局、「異常」な子であることを意味していると思われるからである。

「八拳鬚」云々に関していえば、『出雲国風土記』にも次のような所伝が見え、類型的な表現と受け取れる。

三澤の郷 郡家の西南のかた廿五里なり。大神大穴持命の御子、阿遲須积高日子命、御須鬚八握に生ふるまで、夜書

哭きまして、み辭通はざりき。その時、御祖の命、御子を船に乗せて、八十嶋を率て巡りてうらがへし給へども、猶哭き止みまさざりき。

ここで気がつくのは、本牟智和氣も阿遲須伎高日子も、共に船に乗せられていることである。本牟智和氣の場合は「尾張の相津に在る二俣楢を二俣小舟に作りて、持ち上り来て、倭の市師池、輕池に浮かべて、其の御子を率て遊びき。」(『記』)とされている。吉田氏は、八拳鬚が生えるまで哭いていたりしゃべらなかつたりというのは、魂の鎮定されていない状態であり、それを船に乗せるのは鎮魂呪術の一つであると考えている。だが、船に乗ることが鎮魂につながるのは何故だろうか。

本稿の問題の中心であるヒルコは、嬰兒形と考えられ、そして舟で流された。また、少名毘古那は舟でやって来た。これらを考え合わせると、「嬰兒形の神が舟に乗る」というモチーフはきわめて根本的なものとしてあつたのではないかと思われる。

六、「舟」の觀念をめぐって

このように考えてくると、次に、舟をめぐる様々な問題——舟の性質・舟にて放棄されることや寄り着くことの意味等——に言及する必要があるだろう。

まず、舟が神の乗り物であつたことを確かめるため、その例をあげてみたい。『記』によれば、葦原中国平定の際使者となつた建御雷神は、天鳥船神を副えて大国主のもとへ遣わされてお

り、恐らくはこの船に建御雷神が乗って向つたことを意味していると思われる。『紀』ではこの國譲りの場面で熊野の諸手船(亦の名は天鶴船という)が登場し、大国主の使者稻背脛を乗せている。火遠理命は無目勝間の小船で綿津見宮へ赴いた。『撰津国風土記』逸文では、天稚彦の降臨に付き添つてきた天探女は天磐船でやって来る。この船は『紀』では饒速日命の乗り物ともなっている。この他既にあげた例では、少名毘古那の天之羅摩船、本牟智和氣の二俣小舟等がある。また、舟の名があがらない例では、『出雲国風土記』中の阿遲須伎高日子の船や、『播磨国風土記』中の「天照大神の坐せる船」等を見ることができ。このように、神が舟に乗っている例は多数見出すことができる。『常陸国風土記』に神に舟を献上する話があることや、『撰津国風土記』逸文に見られる神功皇后の話では神の託宣によつて神の船を造っていることなど、ますます舟が神の乗り物であつたことを思わせるだろう。舟は、そういう〈聖〉なる乗り物であつた。

このことは、「枯野」の琴の伝承にもよくあらわれている。

此の御世に、免寸河の西に一つの高樹有りき。其の樹の影、且日に當れば、淡道島に逮び、夕日に當れば、高安山を越えき。故、是の樹を切りて船を作りしに、甚捷く行く船なりき。時に其の船を號けて枯野と謂ひき。故、是の船を以ちて且夕淡道島の寒泉を酌みて、大御水獻りき。茲の船、破れ壞れて鹽を焼き、其の焼け遣りし木を取りて琴を作りしに、其の音七里に響みき。

以上が「記」による「枯野」の伝承である。「朝日に——、夕日に——」という形は大樹伝説の典型的な表現であるが、この「枯野」の伝承に酷似した例として『播磨国風土記』逸文に見られる「速鳥」という舟の伝承をあげることができる。

駒手の御井は、難波の高津の宮の天皇の御世、楠、井の上
に生ひたりき。朝日には淡路嶋を蔭し、夕日には大倭嶋根
を蔭しき。仍ち、其の楠を伐りて舟を造るに、其の迅きこ
と飛ぶが如く、一楫に七浪を去き越えき。仍りて速鳥と號
く。ここに、朝夕に此の舟に乗りて、御食に供へむとして
此の井の水を汲むに、一旦、御食の時に堪へざりき。故、
歌作みして止めき。

枯野にせよ速鳥にせよ、朝日には淡路島まで、夕日には高安
山或いは大倭嶋根までその影が及ぶという特殊な樹で造られた、
すばらしく速い舟である。この両の木はそういった「異常」性
から考えて「聖」なる木であり、それを材として用いた「枯野」
及び「速鳥」は、まさに「聖」なる乗り物と考えられる。

思うに、この「聖」なる木とは、神の依り代なのではないだ
ろうか。「枯野」や「速鳥」は神の依り代である聖木で造られて
いるため、舟にも靈威があったと考えられるのである。この見
方をさらに拵げていけば、木はすべて神の依り代としての性格
を有しており、それを用いて造る故に舟は神の乗り物であると
捉えることができる。「枯野」や「速鳥」が特に靈威を発揮した

のは、その材となった木の靈力が強かったためであり、より基
本的には舟はみな神の依り代としての性格を持っていたと考え
られるのである。

折口信夫氏は「髻籠の話」^(注18)の中で、竹の籠は本来儀式の依り
代であったのが、その用途が忘れられて供物容れとなったと考
え、「ここに毛色の變つた一類の籠がある。其は火衰理ノ命の目
無堅間・熊野大神の八目荒籠・秋山下氷壯夫の形代を容れたと
いふ川島のいくみ竹の荒籠など、ぼつ／＼見えてゐるのが其で、
どうやら供物入れが神の在処であったことを暗示してゐる様で
ある。」と述べている。折口氏の考え方によれば、無目勝間の小
船は神の依り代であったということになる。

このように考えると、舟に乗って現われるのは、舟に依り付
いた存在、「聖」の側の存在ということになる。

そこで思い出されるのは所謂貴種流離譚である。身近な話で
その代表といえは桃太郎や瓜子姫であろうが、これは先に述べ
た「嬰兒形の神が舟に乗る」モチーフとして捉えることにより、
スクナヒコナやアジスキタカヒコ・ホムチワケと通じるものが
あると言える。夫も、桃太郎の桃や瓜子姫の瓜は、所謂「舟」
とは異なり中空の果実であるから、うつぼ舟漂流譚の範疇とし
て考察することができる。

柳田国男氏は、「うつぼ舟の話」^(注19)の中で、「うつぼ舟」を次の
ように定義した。

沖より外の未知の世界は、殆ど有る限りの空想の千變萬化
を許したにも拘らず、如何なる根強い經驗の力であつたか、

海を越えて浮び乗る異常の物は、例へば死人を納めた木の箱の如きもの迄、我々の祖先は一括して、常に之を「うつぼ舟」と呼ぼうとしたのである。

要するに「うつぼ舟」は、やはり「異常」であることが強調されているわけである。柳田氏はこの論文中にいくつものうつぼ舟漂流譚をあげているが、その中の一つである大隅正八幡宮の本縁譚は、幸い文字になって残っているので、次にあげてみたい。

震旦國陳大王娘大比留女。七歳御懷妊。父王怖畏ヲナシ。汝等未幼少也。誰人子有慥申ベシト仰ケレバ。我夢朝日光胸覆所娠也ト申給ヘバ。彌驚テ。御誕生皇子共。空船乗。流レ着所ヲ領トシ給ヘトテ大海浮奉。日本大隅磯岸着給。其太子ヲ八幡ト號奉。依此船着所ヲ八幡崎ト名。是繼躰天皇御宇也。大比留女天筑前國若楯山ヘ飛入給後。香椎聖母大菩薩ト顯給ヘリ。皇子大隅國留リテ。正八幡宮祝レ給ヘリ。

（「大隅正八幡宮本縁事」『惟賢比丘筆記』続群書類従 第三輯上）

この説話は、三品彰英氏も、箱・舟・筏等に乗って漂流する型の伝説を紹介した論文「箱舟漂流神話その他」^{注21}中におさめ、うつぼ舟型伝説の典型としている。また、三品氏も、箱舟という概念を今少し広げて考えれば、桃太郎や瓜子姫もその中に含

め得ると考えており、さらにヒルコ放流譚をもそこに類属せしめているが、それらが嬰兒形をとっていることに触れはしなかった。だが興味深いことに、三品氏が紹介した朝鮮の伝説の中に、嬰兒が水中に捨てられるものが見られるのである。話が少々前後して恐縮だが、「嬰兒が舟に乗る」^{注22}モチーフは、やはりかなり根本的なものと考えずにはいられない。さて、「うつぼ舟」自体を如何なる觀念として捉えるか、ということになるが、大変示唆的な見解を展開しているのはやはり折口信夫氏である。^{注23}これも少々長くなるが、次に引用したいと思ふ。

うつぼ舟は、中が中空になってゐるものです。同じことばで、うつぼ柱といふものがあります。全物である様に見えて、中が空になってゐる。此が、つまり、うつぼです。このことばは、終ひ迄、語原が訣らぬと思ひますが、うつぼは、少くも、空っぽといふ意味であることが訣ります。

我々は、うつと言へば、空と思つて居ますが、實は、空ではなく、ほんたうに充實して居る時が、うつらしく思はれます。我々が死んだ様な状態や、假睡状態のやうな、さういふ時には、魂は抜けて居ます。魂が這入つてゐると生きている。で、うつし世は、總ての人の生命を綜合した社會といふ様な意味に考へられて來ます。うつし身も、現實生活を營んでゐる體、といふ意味です。その時の状態は、中が空っぽであるその中に、魂が充ちてゐるといふ事になり

ます。今、此考への順序を言うて見ると、物が充ちたといふ状態をうつと言ひ、又、此と同じ様な言ひ方だが、物の中に籠つてゐるといふ状態がうつであり、更に籠つてゐるものよりも、その容れ物だけの空洞を考へたときがうつです。此考へ方は、恐らく、普通の考へ方と順序が逆だ、と思はれますが、静かに考へると、此方の正しい事が、詠ると思ひます。うつといふことばは、それに直く接したものと考へて行けばよいが、其處へしといふ形式の上の過程を経たことばが出て來、そして一方のうつは、空虚といふ意味に決つて來てゐるので、ちよつと其處に考へ難い所があるのです。それから、うつばのばは何かといふと、此は又問題になるが、略我々には考へられます。木の洞穴などを考へてゐると、それは詠りませんが、もし先を考へると詠ります。つまり、うつとは別であつて、ほは神の心を示すものとして現れて來るし、即、兆です。

折口氏のように考えていけば、「うつば舟」とは神の依り代であるとともに、たま即ち魂の入れ物と考へることができる。より正確に言へば、神の依り付いている舟、たまの入つてゐる舟ということになるのだらう。また、柩をフネとも言い、入棺をオフネイリと言うことなどを考へ合わせると、「舟」はたまの入れ物であつたと考へられる。結局、舟は神の依り代であり、たまの入れ物であり、それ故へ聖なる乗り物である、ということに帰着すると思われる。舟に乗ることが鎮魂につながるのもそのためであらう。

ところで、折口氏はこの論文中で、さらにまた興味深い指摘をしている。竹取物語の赫夜姫も、竹のよ、つまり節と節の間の空洞にいたという意味でうつばの状態にあつたわけだが、折口氏は「よる（夜）」と「ひる（昼）」に関する叙述の中で、この竹のよを持ち出しているのである。

夜といふのは、竹の節と同じで、竹の節などの、うつろの中に籠つてゐる状態がよであつて、それから出た形がひるなのです。夜と晝との關係は、中に居るのと出たのとの違いです。竹の節といふのは、空の様な状態を言ふのであつて、其からすべてのよが出て來るとは言はないが、ともかく、よといふことばから、色々意味の岐れて行く元には、此を考へなければなりません。それで、葦の髓などもよと言ひ、それから物に籠つて眠つてゐるのをよと言ふのだと思われまゝです。此に對し、ひるといふことばがありました。だからどうしても、ひるといふことばは初めて出現した時を表わすことばでなければなりません。時間では、我々の考へでは、朝に對してひるだが、それはずっと繰り返して、早く考へなければなりません。魂で言へば、よに籠つてゐた魂の現出した時がひるです。

この折口氏の見解をもとに、葦舟に乗つたヒルコを思い浮かべるのは、あまりに大胆な推定であらうか。折口氏自身は、ヒルコの「ヒル」を虫の「蛭」の方に結びつけて考へてゐるらしいが、どうも、葦舟とは葦の髓、即ち葦のよでできているうつ

ほ舟で、岐美二神の子として初めて現出したひるこは、葦のよに籠った状態で流された「貴」なる存在である、と勘ぐつてみたくなるのである。だがこの読みに関しては、ほかに根拠があるわけでもなく、自分でも大胆な憶測の感をまぬがれないので、勘ぐるだけにとどめておこうと思う。

ただ、葦舟であろうと天磐櫛樟船であろうと、それはやはり神の依り代であろうし、ヒルコが「聖」なる存在であることはまちがいあるまい。

七、太陽の舟と海上他界

うつぼ舟について触れた場合、さらに考えざるを得ない問題として、太陽船——太陽が舟で移動する——の観想をあげることでできる。太陽船の伝承がほぼ世界中に分布し、その信仰の痕跡とみられる太陽船表象絵画もまた世界各地の遺跡から発見されていることは、既に松本信広氏や松前健氏によって報告されているところである。日本についても、福岡県で発見された珍敷塚古墳の壁画には、上方に太陽表象と見られる同心円を伴う、鳥のとまった舟の図が認められることが報告されており、太陽船信仰が行なわれていたとしても確かに不思議はないと言える。今、この太陽船の問題がなぜうつぼ舟の問題から派生するのかといえ、うつぼ舟漂流譚については、その流される存在の太陽起源ということがしばしば問題にされてきているからである。

先にあげた「大隅正八幡宮本縁事」もそうであった。大比留

女は日光に胸を覆われて日神の子を生んだのであり、その子と共に空船で流されている。これと同系統の説話としては、対馬国豆酏郡内院村に伝わる「対馬の天童」の伝説があげられる。それによると、照日の菜という女が一人の娘を生み、その娘は

日輪の光に感じて妊娠した。やがてその娘から日輪の精である男の子が生まれ、天道童子と呼ばれる、というものである。この天童の母は、不義のためにうつぼ舟で流された宮中の女院で、内院村の浜に漂着した時既に懐妊しており、そこで天童を生んだ、とも伝えられるという。このように、日神の子がうつぼ舟で流される説話は確かに存在している。殊に「大隅正八幡宮本縁事」では、日神の子を身籠るのが「大比留女」であり、岐美神話における「大日靈貴」と結びつけずにはいられない。この説話中母親もろともうつぼ舟にて流される日神の子にしても、やはりそこにはヒルコを重ね合わせて良いように思われるのである。ヒルコの放棄に用いられた船が、「紀」本文では「天磐櫛樟船」といわれ、第二の一書では「鳥磐櫛樟船」といわれ、その亦の名として「記」に「天鳥船」と伝えられていることも、松本氏らによって報告された、太陽船を示すらしき鳥船表象とのつながりを思わせ、ヒルコが「日子」である可能性を感じさせ

る。ただし、既に考察したように、舟は基本的には神の乗り物であり、必ずしも日神の乗り物とは限らない。また、うつぼ舟はたまの依り付いている舟である。とすれば、流れ着いたうつぼ舟中のまれびとが、日神の子と考えられたのは何故か。うつぼ舟の流れ出る所、或いは流れ着く先は、何処と考えられていた

のだらうか。

沖繩の祝詞（おたかべごと）に見られる日神の初生児オトヂチヨの場合、その生し敗り子がネズミとなつて下界に降ろされ、そこでも悪さをするために、海上他界と考えられるニライへと流されることになつてゐる。^{（注29）} また、火衰理命の場合には、無目勝間の小船が行き着く先は海神の宮である。うつぼ舟の行き着く先は海の果てにあると意識せられていた異郷、他界なのであつた。さらに、少名毘古那が粟莖に弾かれて常世の国へ去つていったことから、その海上他界は即ち常世の国とおさえることができる。このように海の果てに他界が想定せられたことには、水が聖なるものであり、海が聖なる空間と考えられていたこと^{（注30）}などがその一因として働いてゐるのかもしれない。それはともかく、古代人たちにとつて、海の果てには「常世」が存在し、それはたまの住む国であるゆえ、舟によつてこの世との往復が行なわれると考えられたに違いない。つまり、舟は渡海の手段であり、しかもたまの入れ物であるという二重の意味を持つてゐる。従つて、どこからともなく寄り着いたうつぼ舟は、「常世」からのたまの来訪を意味してゐるのである。また一方で、太陽が上りそして沈む海の果ては、太陽の国としても意識されてゐただらう。うつぼ舟中のまればとがしばしば太陽に起源を持つ形で伝承されてゐるのは、恐らくそのためである。

ところで、「海神（ワタツミの神）」は、『紀』第六の一書・第七の一書では「少童命（ワタツミの命）」の字があてられており、童形と意識されてゐることがうかがえる。即ち、海の果ての異郷には童形の神の存在が考えられていたのであり、先に述

べた「嬰兒形の神が舟に乗る」モチーフや、日神の子がうつぼ舟で流されるという伝承も、この点と少なからず関連してゐると思われる。うつぼ舟漂流譚を含め、貴種流離譚の類は、こういった諸々の要素が複雑にからみ合つた結果の産物と考えられるのである。

次におさえておきたいのは、この海上他界の性格である。岐美神話中に見られる「常世の国」には、「妣の国」「根の国」（根の堅州国）、「黄泉の国」をあげることができるが、それらと海上他界との間にはどのようなことがいえるのだらうか。

「妣の国」の性格は今一つ不鮮明であるが、スサノヲがそこへの回帰を切望した結果追放されていった「根の国」に重ね得るとすれば、「黄泉の国」も含めてこの三つの国は共に地底の暗黒に存在する他界と考えることができる。そしてこの地底の他界は、記紀における描写からも判断できるように、「死の国」、ヘケガレの国」としての性格が濃厚であつた。ここでは「常世の国」は「常夜の国」とも考えられてゐるに違いない。^{（注31）} 而してその一方には「神の国」としての高天原が存在する。従つて、岐美神話では「常世の国」として、「ハレの国」である天上他界と「ヘケガレの国」である地底他界とがかかげられており、「ハレ」と「ヘケガレ」の觀念が明確に分離されてゐるわけである。これに對して海上他界の場合は、明らかにこの両義を担つてゐる。そこでは「ハレ」も「ヘケガレ」も共存し、單純に「聖」の国として考えられてゐるに過ぎない。沖繩のニライカナイにしても、元は死の島であつたが、理想郷としても意識されたといふ。^{（注32）}

この点から考へるに、海上他界の觀念とはかなりプリミティ

ブなもので、本来的な「常世」の観念を伝えてくれるのではないだろうか。水平的な世界観に基づいて、「ハレ」も「ヘケガレ」も包含する、たまの国としての「常世」の様を、そこに読みとつてよいように思うのである。これに比べると、天上他界及び地底他界の観念は、「ハレ」と「ヘケガレ」の観念がかなり明確化した後、しかも垂直方向の世界観が発達した後に形成されたものではないだろうか。

以上のことをまとめると、海上他界について次のようにいえる。それは、海の果てに存在する常世の国、たまの住む国であり、「ハレ」と「ヘケガレ」の共存する「聖」なる国である。その国との往復の手段には、渡海の道具でしかたまの入れ物である舟が考えられた。そのため、寄り着いた舟には常世から来訪したたまが乗っていると意識された。また、そこは太陽が上り沈みゆく国とも考えられたため、舟の中のまれびとはしばしば太陽との関連を伝えられた。さらに、そこは海神の国とも考えられ、海神は嬰兒形と考えられていたことも手伝って、舟中のまれびとは嬰兒もしくは童形であるとも伝えられた。これらの要素が複雑にからみ合せて、うつば舟漂流譚は成り立っているのである。

八、流されるヒルコの本性

ヒルコの出生と放流に付随して考えられることを、ここまで漫然と連ねてきたわけであるが、最後にそれらをふり返りつつ、そこから求められるヒルコの本来の性格をまとめてみたい。

まず第一に、ヒルコという名称はヒルメと対になるものであることを考えた。ヒルメは日神の巫女と考えられるから、ヒルコは太陽信仰に関わる男性霊格と考えられる。場合によっては、ヒルメとヒルコは母子の関係とも言うことができる。第二に、ヒルコとササノヲに「嬰兒形」という共通点を見出し、そこに「聖」の象徴という意味づけを試みた。さらに、嬰兒形の神が舟に乗るというモチーフを想定した。そこで第三に、「舟」の観念をめぐってその性格を考え、それは神の依り代であり、たまの入れ物であるという結論に達した。とすれば、ヒルコはそういう「聖」なる乗り物で流されたわけであり、これはヒルコが「聖」なる存在であったことを示していることになる。最後に、うつば舟の流れ着く先が海上他界であることを取りあげて、その性格を検討した。それは海の果てにある常世の国、たまの住む国で、「ハレ」と「ヘケガレ」の両義を担っている。従って、「神の国」であると同時に「死者の国」でもあり、この点で高天原や根の国・黄泉の国とは性格を異にしている。また、太陽が上り、沈むその先が海の果ても感じられたため、太陽の国という性格も付与されていた。ここから所謂太陽船の観念が発生したものと思われるが、ヒルコの放棄に用いられた天磐櫂樟船がそうだった太陽船の性格を有する可能性も確認した。しかも、海の果てには海神の国があるとも考えられていたらしきことから、その海神が嬰兒形もしくは童形と思われていたらしきことから、「嬰兒形の神が舟に乗る」モチーフと海上他界の観念とが結びつけられることの一環は確認できたといえる。

これらのことをすべておさえ直したうえで、今一度ヒルコの

性格を考えてみるならば、次のように述べるほかはない。ヒルコは、太陽に関わる男性靈格で、嬰兒形をとっており、その依り代である舟によって、太陽の国である海上他界へと送り出される存在であった。つまり、太陽に起源を持つ、海の果ての異郷の神なのであった。それゆえ、ヒルコ放流譚では、その流されること、放棄されることにこそ、最も重要な意味が認められる。舟によって漂流することにこそ、ヒルコの本性性が反映されているのである。

加えて今一度繰り返し返さなければならぬのは、海上他界が「ハレ」と「ケガレ」の両義性をもつことである。なぜならば、既に述べた如く、兄妹婚の産果としてのヒルコはまさにその両義を担う存在だからである。記紀神話中のヒルコ像が不鮮明であるのも、このようにヒルコがもともと両義的な存在であったためかもしれないからである。

いずれにしても、このように考えてくると、ヒルコを「生み損い」であるとか、「不具児」であるとか言って簡単に済ませてしまうことはできない。ヒルコの「異常」性、「神聖」性については、今一度考え直す余地が残されているのである。

- 〔注1〕岡正雄「日本民族の起源」平凡社 昭33、小島環礼「イザナキ・イザナミの婚姻」(『宗教研究』171号 昭33)、福島秋穂「ヒルコ神話をめぐって」(『国文学研究』昭42・10)、シンポジウム日本の神話1『国生み神話』学生社 昭47 等
- 〔2〕松岡静雄「紀記論究」神代編二 諾冊二尊 同文館 昭6
- 〔3〕松前健「日本神話の新研究」桜楓社昭35、岡田精司「天

皇家始祖神話の研究」三品彰英編「日本書紀研究」第二冊 塙書房 昭41、次田真幸「日本神話の構成」明治書院 昭48 等

〔4〕岡田精司「国生み神話について」(『歴史評論』75号 昭31)

〔5〕注〔4〕論文

〔6〕小島環礼 注〔1〕論文「地搗歌」本文については、文芸委員会編「俚謡集」を参照されたい。

〔7〕西郷信綱「近親相姦と神話」(『展望』昭45・7)

〔8〕古橋信孝「兄妹婚の伝承」シリーズ古代の文学5「伝承と変容」武蔵野書院 昭55 所収

〔9〕注〔8〕論文

〔10〕三品彰英「国生みと諸神出生の神話」『三品彰英論文集』

第一巻 平凡社 昭45・7 尤も、西郷氏は注〔7〕論文 中で異なる見解を述べている。

〔11〕三谷栄一「素戔嗚尊の性格」(『古事記年報』20号 昭51・1)

〔12〕この構造については、古橋信孝「古代歌謡論」「神話論」

冬樹社 昭57 に学ぶところが大きかった。

〔13〕土橋寛「古代歌謡と儀礼の研究」岩波書店 昭40

〔14〕吉井巖「天皇の系譜と神話」塙書房昭42

〔15〕シンポジウム日本の神話1『国生み神話』、泉谷康夫「記紀神話形成の一考察」『日本書紀研究』第一冊 塙書房

昭39、注〔11〕論文 等でとりあげられている。

〔16〕吉田修作「ヒルコ伝承」注〔8〕書所収

〈17〉時代は下るが、小き子譚の代表である一寸法師が、「お椀の舟に箸の權」を用いて京へ上るのも、同様のモチーフによるのではないだろうか。

〈18〉『折口信夫全集』第二卷 古代研究(民俗学篇1) 中央公論社 所収

〈19〉『日本靈異記』上卷第三話では、落ちて来た雷は小子となり、再び昇天するために桶の船を所望する。

〈20〉柳田国男『妹の力』創元社 昭15

〈21〉『三品彰英論文集』第三卷 平凡社昭46 所収

〈22〉『日本靈異記』中卷第三十話には、十歳になっても歩けず、泣いて乳を飲む子を、淵に投げ入れる話がある。本来は「聖」なる存在である子が、仏法の阻害者として変容せしめられる点に興味深い例である。また、中卷第三十九話には、耳の欠けた、つまり不具の薬師仏の木像が、大井河を流れ来て砂に埋れている話がある。

〈23〉『石に出て入るもの』『折口信夫全集』第十五卷 民俗学篇1 所収

〈24〉松前健氏はさらに舟形木棺・石棺の存在をあげて、舟葬と海上他界の問題へと導いている(「太陽の船と常世信仰」『日本神話と古代生活』有精堂 昭45 所収)が、ここではそのように実体的には捉えず、「舟」をめぐる觀念のレベルにとどめておく。

〈25〉松本信広「古代伝承に表われた車と船——徐偃伝説と造父説話の対比——」(『日本民族学』第四号 昭29)

〈26〉松前健 注〈3〉書、注〈24〉論文

〈27〉注〈25〉論文

〈28〉三品彰英「対馬の天重伝説」『三品彰英論文集』第四卷 平凡社 昭47 所収

〈29〉『久米中里間切旧記』採録 本稿では、伊波普猷氏によって部分訳を施されたもの(伊波普猷全集第五卷「日本文化の南漸」平凡社 昭49)によった。

〈30〉松本信広「蛭児と日女」『日本神話の研究』鎌倉書房 昭21、波平恵美子「ケガレの構造」青土社 昭59 等を参考にした。また、三貴子による分治の体系に「海原」「滄海原」の文字が見えることから察することができる。

〈31〉折口信夫「妣が国へ・常世へ」注〈16〉書 所収

〈32〉注〈31〉論文 (本学卒業生)